

朝鮮

引き揚げてん末記

鳥取県 由 浪 英 一

当時元山に居住していた私どもは、終戦後、態度の豹変した韓国の保安隊員に住居を追い出された。私どもは隣家の大石さんの住居に同居させられた。西風の強くあたる寒い部屋でちっ居同様であった。

その間われわれ日本人は、捕虜同様に、ソ連兵の監視の下に、連日元山埠頭に引率されて行き、軽油缶や重油入りのドラム缶を、ソ連が自国に持ち帰るために、汽船に搬入させられた。

しかし幸いにして、大石さんの近所に住んでおられ

た、阿多家の元朝鮮石油工場の技師だった方のお取計いによって、その労役は免除せられた。そして当時、埠頭に放置されていた大量のソーダ灰を原料として、洗濯ソーダを製造する労役に就かせられた。それで時々その製品をひそかに持ち帰り、それを教え子の鮮人の米穀商の家を持って行って、こっそり白米と交換して貰った。ところがどうしたにか、その洗濯ソーダが、ときどき市場で販売されたので、ソ連兵の怪しむ所となって、用心をせねばならぬことになった。それではこれは危険だと思つて止めてしまった。

いつまでもこうしておれぬ。なんとかして元山を脱出したいものと、その機をうかがっていたが、種々計画を立てた結果、夜陰に乗じて思いきって、私は三十キ口もあるリュックサックを背負い、当時まだ数え

年六歳の長男の手を引き、家内はまだ二歳の長女を背負って、元山郊外の元朝鮮石油の社宅に逃げ延び、そこで囲りの状況を偵察して、ソ連が鉄原附近で演習しているのを避けて、一週間ほど社宅で待機した。何故かというところをソ連兵に発見されると、否応なしに連れ戻されるのを目撃していたからである。その間、ソ連の兵卒は銃を持って、ときどき社宅に侵入して、婦女子を捜したので、幾家族も避難同居して婦女達は、その都度直ぐさま床下に隠れた。

そうこうしているうちに、保安隊員を買収して、葛麻駅から満州と北鮮の国境あたりからの避難民ばかり乗車している貨物車に、逸早く潜りこんだ。全員で六、七人ぐらい。それでやれやれと安心した。

途中鉄原を過ぎてから梨木里駅で下車して、避難者の他の七、八十人ぐらいと合流して、行軍を続けた。鮮人部落を幾つも通過したが、何分にも大部隊なので鮮人達も取り囲むばかりで、手出しもし得なかった。その辺の田園には、彼等が日本人から奪った保険証書や貯金通帳が、スタスタに引き裂かれて散乱していた。

それから更に行軍を続けて、遂に洛東江の上流の臨津江に到着し、皆早く南鮮に行きたいと押すなぐで渡し船に乗った。何分にも多勢の者が乗ったので、かなり大きな船も深く沈んで、吃水線から船べりまで五、六センチという状態で、危うく対岸に上陸することができた。

三十八度線を越えたのだ、さあ、これで北鮮領から南鮮領に脱出することができたぞと、川べりから北鮮領を望見して嬉しくてたまらず、大手を挙げて万歳々々を唱えた。

それから内陸部に脚を向けて鮮人部落を幾つも通過して、夕方小川のはとりの鮮人住民宅に宿泊した。ところが奇縁ともいふべきか、元山で船具店を経営営業していた橋本氏と一緒にあった。それでその夜は安心して宿泊することが出来た。

橋本氏と別れて、私達は南鮮から北鮮への始発駅の逗豆川駅から乗車して、梨木里駅で下車したところが、歩哨の米国兵がすぐさま私達を見つけて連れて行き、衣服の間にDDTの薬剤を散布してくれ、シラミが面

白いほどボロボロと落ちた。

京城駅には夜十二時頃に着き、広い待合所のコンクリートの上に横たわって寝た。

翌朝は駅前の西本願寺別院で大きな握り飯を頂戴し、そのうまかったこと。

そして九時頃釜山行の列車に乗り、夕方釜山に到着し、博多行き^の対山丸の人となり、翌朝博多に上陸した。

即日博多駅から乗車して広島駅を通過したとき、なんでも新兵器にやられたという噂通り、一面の焼野が原だった。原爆とは後で知ったことだった。

かくして元山を脱出してから、八日目の夕方郷里の土を踏んだのであった。

引揚げ後の苦難の道

福島県 渡 辺 一 正

私は、五歳の時、父が朝鮮釜山の警察官として勤務

のため、両親と弟一人と一緒に、大正十一年と記憶しているが、福岡県博多港から朝鮮に渡航した。

幼い時ではあったが、初めて乗る大きな客船に、嬉しい気持ちで乗りこんだ。玄海灘の荒波で船酔いし、苦しかった思い出が今でも残っている。釜山の日本人学校を卒業後、朝鮮総督府鉄道局に就職し、旅客専務車掌として、勤務していたが現地召集となり、兵役に付いた。

父は昭和十九年病気で死亡し、弟も兵隊に行き、母は一人となったが、さいわいにも私は釜山で軍隊生活を送っていたので、母の面倒は見る事が出来た。昭和二十年八月十五日、終戦となり、私達は信じられないと、意気盛んであったが状況が判るにつれ負けた悔しさで兵舎内は泣きわめき、混乱の呈であった。これからどうなるのか、日本に帰れるのか、日本に帰っても生活できるのか、奴隷になるのか、等々皆不安な気が満ち溢れていた。アメリカ軍が進駐して来て武装解除となり、九月七日除隊となった。

そのまま兵舎にいたが、母や弟のことが心配で仕方